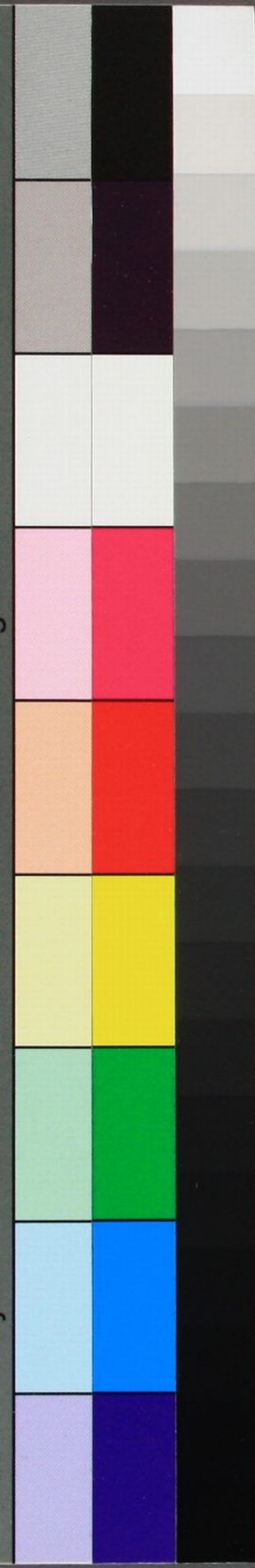


詩集

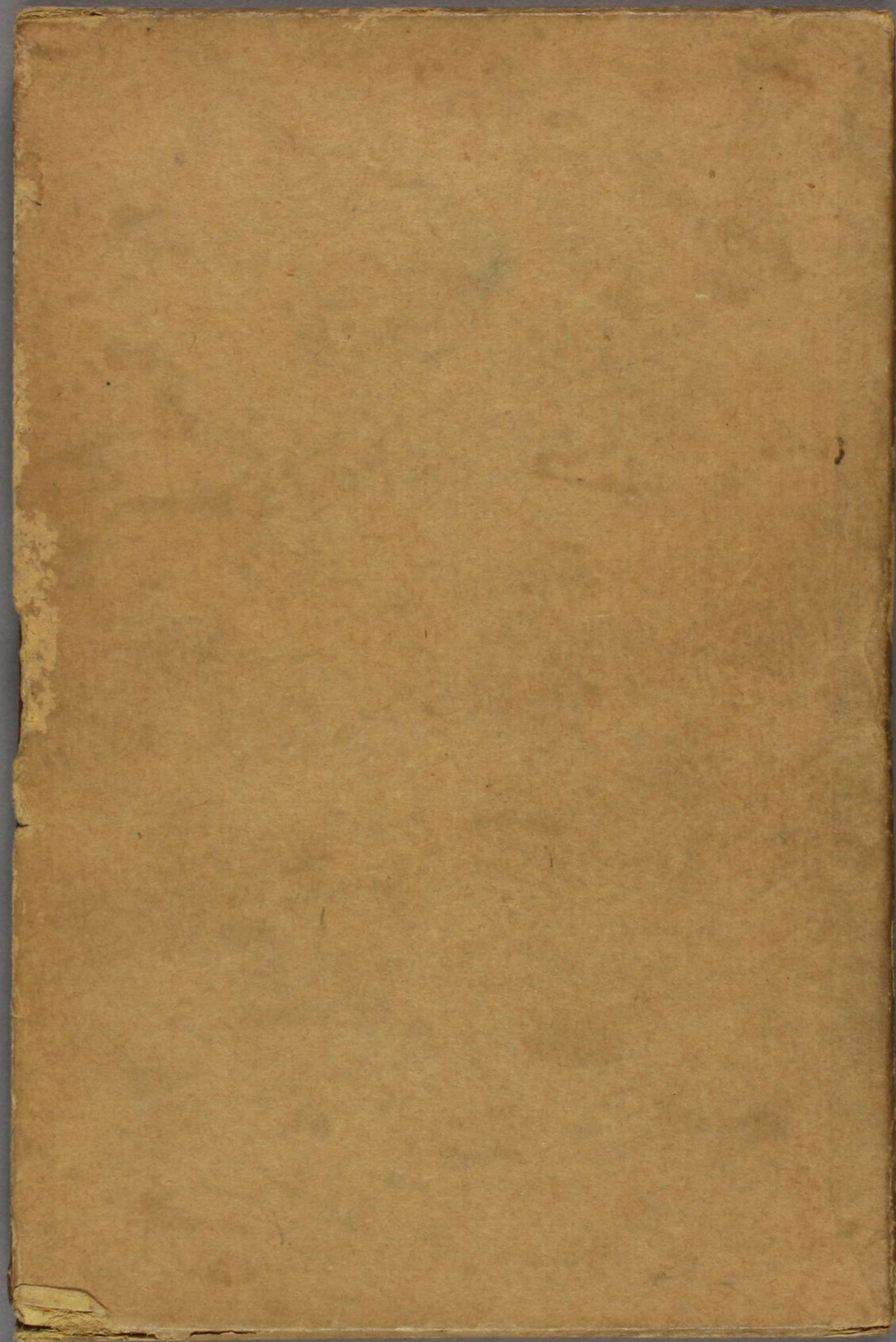
見知らぬ愛人

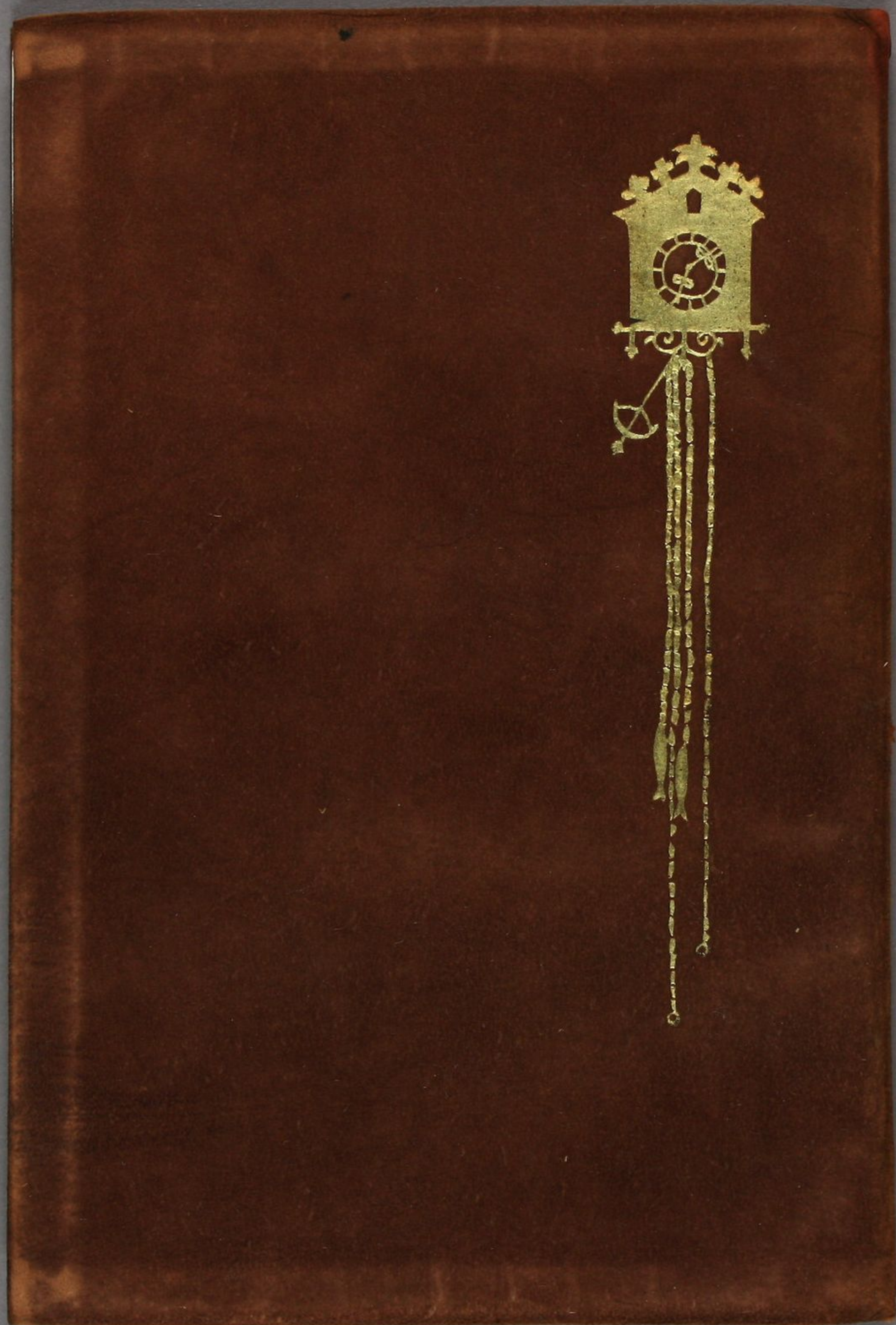
西條十八著



詩集見知らぬ愛人

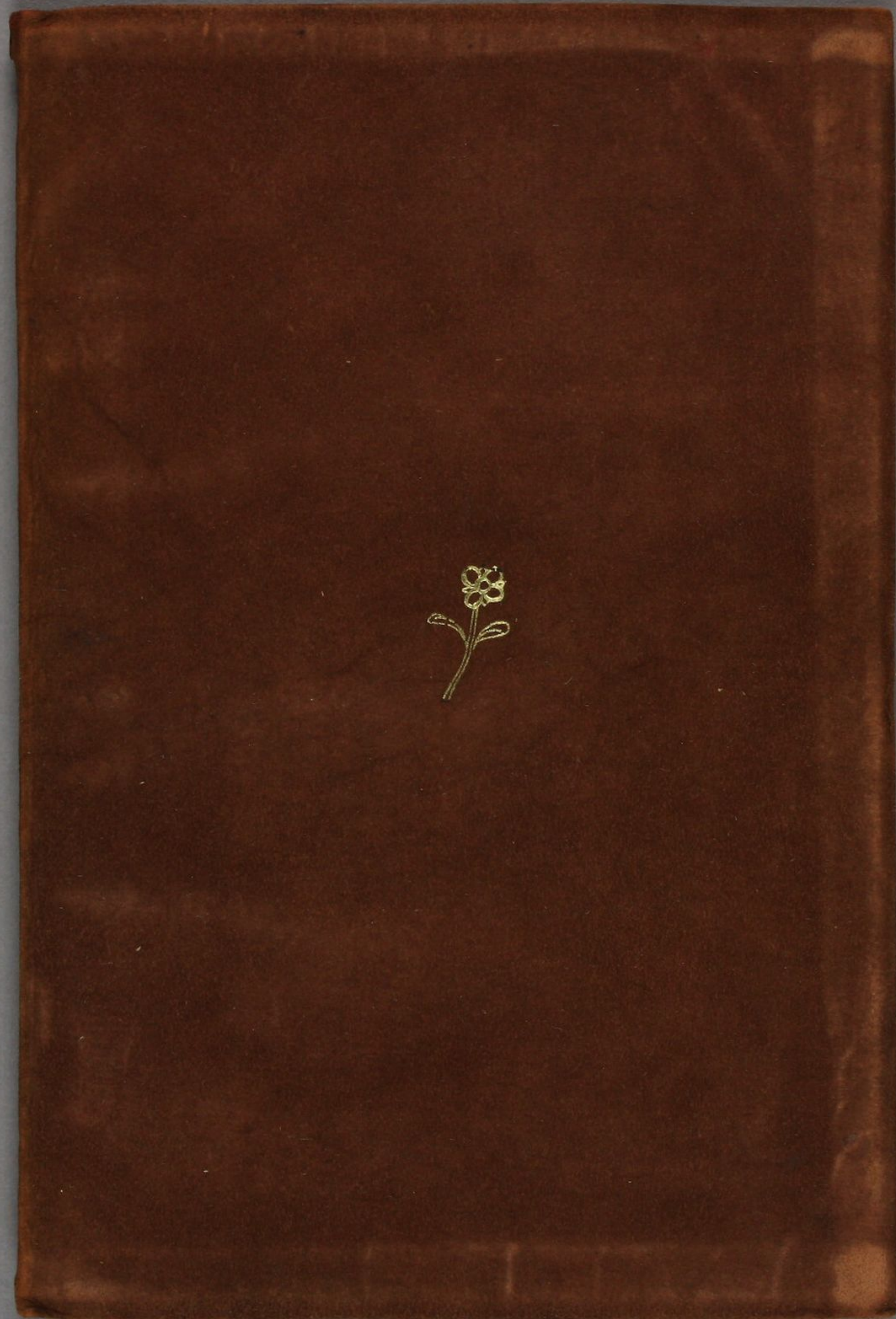
西條八十

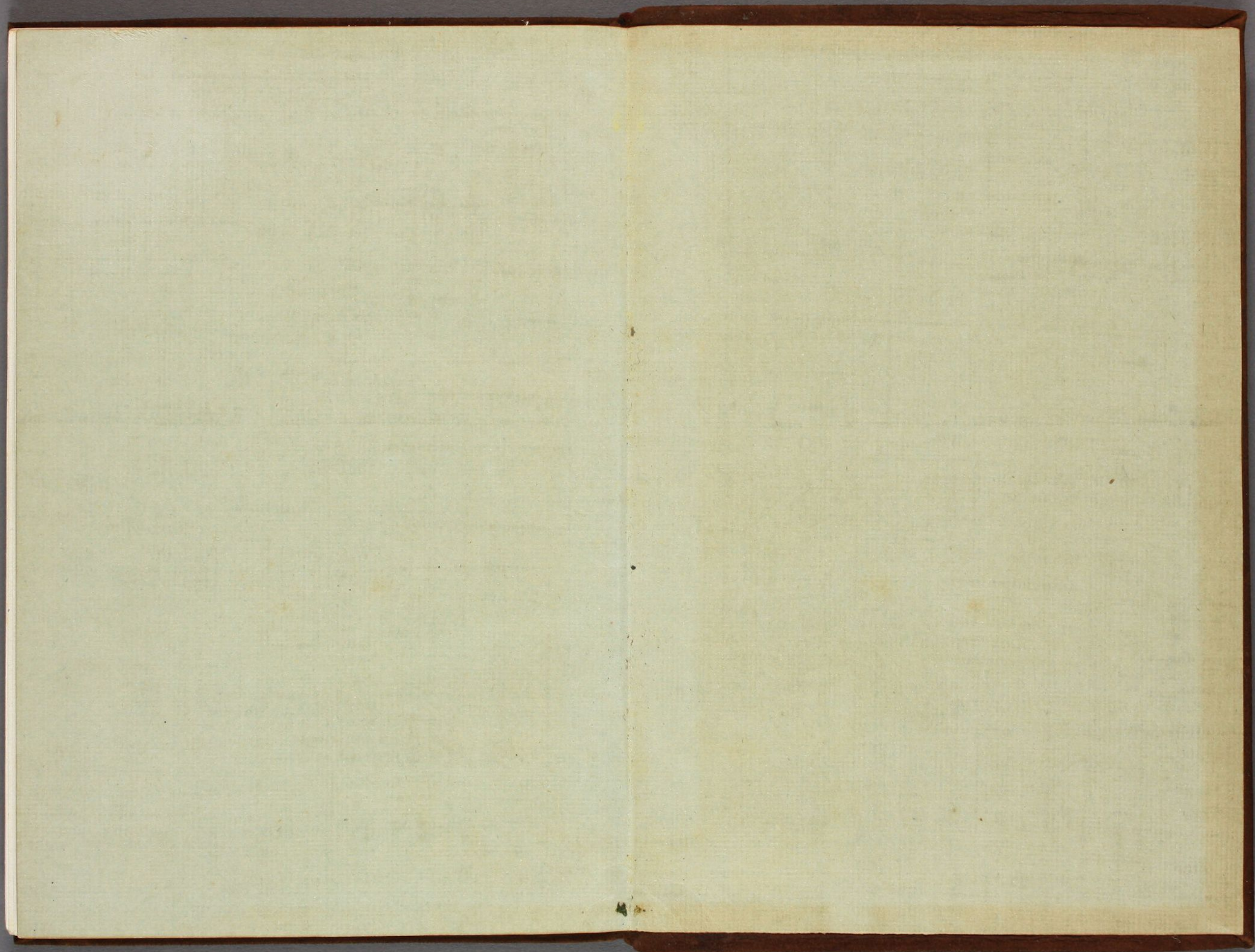




見和
之
夢
人

正
德
十





集 詩

人 愛 故 山 知 見

十 八 條 西

集 詩

人 愛 女 与 知 見

十 八 條 西

恩師
吉江喬松氏に獻す

自序

第一詩集『砂金』を公けにしてからもう足かけ四年になる。今更のやうに歳月の早いことをおもふ。この間『砂金』に収めた二三の詩篇の華やかな姿と、かりそめに編んだ一篇の童謡集とが世の嗜好に適合して、私は案外ポピュラーな詩人になつた。今では私はかなり多数の自分の詩の讀者を持つた幸福な身のうへである。

併しながら私は昔、誰顧みる人として無い自分の詩を書きため書きためしては机の抽斗に藏してゐたあの當時の寂しい、しかもひとすぢな心持を忘れることが出来ない。實にあのひとすぢの心持こそは、今日までの私を強く生してきた。いかなる境遇によつても冒されず生來の私の美しい夢を庇護しつづけてきた。苦闘に屈しなかつた私の夢は、また安住に馴致されてはならない。

氣まぐれに冬の曠野を輝かした日光は、やがて冷

たい夕風とともに惶しく消え去るであらう。その時こそ、わが愛する巡禮者の夢の履よ、昔の日にまして美しく堅毅なるひびきをたてよ！

詩作の態度としては、私は今なほ嘗て第一詩集の序文に於て述べたと同一の信條を奉じて居る。併しながら一個の人間として、日夜より廣きよき深き世界への竄入を焦慮しつつあるがために、わが想念と不熟なる手法とはつねに相矛盾し撞著し、本集中の詩篇に於ては殊に見苦しき表現の破綻を示して

ゐる。これまた途上のことで止むを得ない
序に、私はこの集を以て、嚴正な意味での「砂金」に次
ぐ自分の第二作集と認めたい。尙卷末の散文「四萬
より」は二十二歳の折の作で、當時雑誌「假面」に掲げた
ものである。今にしてこれを見ればさすがに面は
ゆい感じもするが、ざりとてそのまま棄つるには忍
び無いので敢てここに収めた次第である。

大正十一年一月

著

者

裝釘 安藤 正輝

見知らぬ愛人

老人と帆

——父よ、

今日もひねもす

寂しく砂に臥してなにを想へる、

海は暮れ

黄なる月見草のひらきそめぬ、

3 いざ網をたたみて

灯ともしびの家に歸らん。

——吾兒わがこよ、しばし待て、

訪おとづれきたる遠祖とほつみぢ先と

われとの會話はなしはいまだ盡はきざるなり、

夕ゆふべの微風かぜに

星ほしは嬰兒あやこのごとく若し、

今いましばらく吾わがをして老おとしいし人人ひとびとと

懷なつかしき歡語かたがひに耽ふけらしめよ。

——父ちちよ、おんみはなほ夢ゆめみつつありや、

砂いさごは黝くろく冷えて

黄昏たそがれの濱はまには人氣ひとけ無なきを、——

見ゆるは、折折さばらし、幻まぼろしのごと

沖邊おきべに浮うかみ、また消ゆる

蒼白あなしろき帆ほかげのみ。

——さなり、吾兒わがこよ、

ああ、沖おきの眞帆まほ片帆かたほ、

5
そのひとつびとつに

鬢びんしろ白よほつみおやき遠祖先のおもかげは宿やどれ、

そはひねもす

月見草つきみくささく砂丘さかをめぐりて

わが衰おとろへし耳もとに

懐ひかししき昔の唄うたを囁ささやくなり。

母の唄

ねられぬままに

起きいでて

夜更よふけの空を眺むれば

冴さえわたる月のおもてに

白ほそくもき纖雲

ほつかりと浮うかびいつ。

ほつかりと、このとき、
添寝の吾兒の
目をさます。

都會の記憶

——スペクトラムの戯れ——

昨日、午、銀座通の電車のなかで
戀人のあかい鞆が、金の緊子が、
窓から透いた柳の葉が、——
その記憶をわたしは指さきで弄つてゐる。

日が燦く渚、ここは遠い田園、

臥てゐる牝牛の白い腹毛に鼻をうづめて
わたしは甘酸っぱい匂を貪る。

波は陰翳をたたんで、いくかへり

キツト皮の靴の踵をひたす、

黄ろい帆が岬をめぐりきたり

あまたの砂山と牝牛とを暗鬱にする。

ああ、夕、家畜の懐に疚く

色褪せた都會の記憶よ、

潮風にふるへる眞白な絨毛、

その中に戀人の赤い鞆が、黄金の緊子が、

灯が、柳の葉が、静かに踊り、めぐる。

墓

吾兒の唇のかげに

いつか生えそめし

小さく、白き、二枚の齒

そよ、かのシングが

涙ぐみつつ過りしといふ

寂しき愛蘭土の

濱邊の墓を偲ばしむ

崖の斷層面

——或る日、わが心に與へたる——

赭土の崖の斷層面

そこには夕日が泛んでゐる、

黒く刻まれた苦澁の痕に

おまへは何を搜めてゐるのだ。

鶯が啼いてゐる、

崖の上には青い芒が茂つてゐる、
あの銀のやうな音は
おまへの心を明るくはしないか。

午から夕まで、おまへは
惨らしい斷層面の搔傷を眺めてゐた、
さうして赭土の黄昏の中に
巨きな生みの母の俵を識らうとした。

幾度か、さやさや過ぎる

微雨こよめの聲あしおと音を聴きき、

また鏡鉞やうはちのやうな遠雷とんらいのひびきに

逞いぶきましい母の息吹いぶきを尋たづねた。

けれど、今おまへは戻かえれ

静しずかな芒すすきのほとりへ、

その茂さかみには、よし欺罔ぎまうの母ははにせよ、

優しい、白しろい踵かかとがほの見みえてゐる。

さうして、ああむかしの鶯うぐいすが

おまへの姿すがたを侘わびて

晝ひるも夜よるも啼なきつづけてゐる。

古き時計

—我家に古き柱時計あり—

時計の奥に

草生ひて

振子も錆びぬ、

字も褪せぬ。

午としなれば

うら悲し、

時計の奥の

湖に

老いし鶯鳥の

叫ぶこゑ。

幼く父に

ゆづられし

時計にふるき

夢を戀ひ、

わが三十年の
春ぞろ
ふかき世界を
訪へば、

時計の奥に
春ふけて
秀も伸びぬ、
月老いぬ。

氷の上の籐椅子

氷のうへの籐椅子、
三個の籐椅子、
今しがたまで傍で語つてゐた
妻と子は何處へか行つてしまつた、
私ひとり、うなだれて、寂しく、
坐つてゐる。

空からはたえまなく降る

白い星の花束。

遠い日のことだ、

深夜の微風に吹かれ、

薄白く、冷たく、ふりそそぐ

花束の電を頸にあびて

かうした黙坐をたのしんだのは。

いま、私は

幽かな野火を夢みてゐる、

さうして心が擾れてゐる。

ああ、幾年も前から

黄金の花押のやうに、しづかに

秣のなかを歩んでくるあの焔は

いつかは漣となつて

この深夜の椅子をも涵すであらう。

24

おうい、——寂しさに

呼びかへす妻と子のかげは

月の上の蝶のやうに。

落葉

女よ、

おまへの白い、ふくらかな乳房に

耳を埋めるとき。

はら、ら、ら、ら、……

25

遠く聞えてくるあの音は何であらう、

灰ほかに觸ふれる羽毛はねか、夜よにつむ粉雪こゆきか、
輕かろくつぶやく微風かぜか。

女おんなよ、おまへは何なんにも知らない、

黒くろくながい睫まぶたはいつかどちて

櫻貝さくらがひのやうな唇くちびるからは

しづかな寢息ねいきが洩もれてゐる。

はら、ら、ら、ら、……。

ああ、またしても眼まなこに浮うぶ谿沿たにぞのの山路やまみち、

そこには二人三人の男おとこが、鞭むちをあげて

黄金きんの驢馬ろばを追おつてゐる

かれらの頭上あたまの上には緋あかい夕月ゆげ、

さめざめと、雨あめのごとく降おる落葉おちば。……

女おんなよ、深夜しんや

ひとりめざめては寂さびしい、

おまへの白しろい、ゆたかな肉體にくたいの底そこに

今宵こんよひもきこえる落葉おちば、

はら、ら、ら、ら、……。

夜の空

山のかなたの戀人は

芒のかげに

今夜も空を仰いでゐる。

猿のやうに

高い榎の木を攀る

私の姿が、

黒い上衣と、白のカフスが

見えようか。

戀人よ、

この五つの指が撫でる

夜の空は乾き、皺疊んでゐる、

擦けばほろろと崩れる灰の空。

芒のかげで

ふるさとへ行く日を
おまへは囁いた。

私は夜毎に

この曇り空を缺いてゐる、

奥からこぼれくる

冴えた、青白い月のひかりを

待つために。

戀人よ、

ふるさとの丘に立つ夜、

おまへの背に、榊の葉に、

月が射したら

いかに静かであらう。

人形を負ひて

わが兒こが負おはせた
セルロイドの人形にんぎやうの重さよ。

ぐるぐると室へやを歩あるいて見せよと云ふ、
詮方しやうほうなしにぐるぐるるとめぐる
古ふるびた紅じゆうたんき絨氈ふの繪模えも様のうへ、

圓卓子まるてえがるのほとり、

モロッコ皮かはの百科全書と、低うそき腕椅子いす、
晩春の午後ばんしゆんの、ほの暗くらき書齋しゆさいの中うち、

ああ、ふとも想ふ

今とぼとぼと辿るは、日の落ちた淋しみしき砂原すなはらか、
はるかに見知らぬ丘かみは起伏おどろし
ところどころ光ひかる河水かほみづ、

己おのれは泊とまりにはぐれた旅人りゆうじんの姿

うしろに長い影を曳く。

ああ、わが兒の負はせた
この永久の人形の重さよ。

向日葵のかげ

のびてゆく向日葵よ、
巨きな黄ろい暈よ、
白い雲が朝に夕に、
そのほとりに湧き、攀れる。

色褪せた腕椅子を

今日もその蔭に据ゑよ、
 わたしは銀河の幻を
 静かに悲しく夢みるのだ。

ああ、數知れぬ

象牙の墓が

青空の銀河に泛んでゐた。

そのとき、

わが古い腕椅子は玉座、

あまへは寂しく、氣高い
 王妃だつた。

ふたりは唇をよせながら

午の向日葵の林の

白い雲のやうに顫へた。

記憶の紅鸚は

黄金の鎖につながれても

秋となれば歸つてくる。

夜ふかく、花粉にまみれ
冷たく砂に眠る身の
肩には紅鵝、頭上には銀河のみ
暗の底にしるく幽けく。

ゆ
く
へ

戀人の姿は知らず、

戀人の顔は知らず、
聞えしは風の音のみ、
長く青き草と
草の實を揺がす風の音のみ。

見しは荒野の遠き空、
ひねもすを
ちぎれちぎれに白雲飛びぬ。

戀人の心は知らず、

とらへしは冷たき夕あかりのみ、

はるばる辿りつきし海の

静けき丘かげに

燕はつかれたるわが靈のごと

うちふるふ。

春の夜の霰

春の夜の

霰はさびし。

幼き日

われを綾せし

若き、病身の

42 小父のごとく。

静もれる夜の

板廂

そのあちこちに、

ばらばら、と

また、ばらばら、と

力なき

手を記たく。

干潟のほごり

また来てしまつたのか

芦のかけの干潟のほとりへ、

夕暮ちかいので

雲雀もゐず

風の音ばかりだ。

わづかな青空が

干瀉に宿つてゐる、

淡い雲のかげが

夢見ごこちに沈んでゐる。

もつれた手摺のやうな影

燐火の蒼白さだ、

それが芦の葉にすがつて

風の音が侘びしい。

干瀉にうつる

をりをりのわが魂のかげよ、

ゆふべも暗い臥床で

寂しくおもひ出でた。

ああ、誰が残して行つた

午の小さいたまり水よ、

おまへ故に、身も心も

夕暮の芦の葉のやうに顫へわたる。

掌

わが掌たなごこに白き砂すなを盛り

琥珀こはくに似たる麥あわの種こを播まく

日ひうららかに照りそへば

麥あわは生おひいづ、青あおく、繁しじに。

見みよ、わが掌たなごこは青麥あわの丘か

雲雀ひばりは囀さへづり

ゆをびかに白雲しらくもうかぶ、

こかげに戀人こひびとふたり

よりそひて何なにをか語る。

晴はられし空そらをゆく風ありて

幻まぼろしは消えてはかなし、――

ふと見るは

わが眼めのまへの

皺しわだみし黝くろき掌てのひら。

白孔雀

妻よ、子よ、

覚める手をかざして、

雪の夜の巷を眺めよ。

家の燦びやかなる燈火は、
舗道の枯柳のかげに漸く睡氣ざし、

おもく、蒼白き雪の總は

椿の葩のごと、なほ落ちしきれり。

廣小路、仰ぐ屋根の大時計は、

いま十一時を指し、

眩しく行きかふ人馬の半面黒像は

ふりつむ雪に溶けつゆれど

われらが待つものは久しく來らず。

否、煌かしき電車は、すでに幾臺となく

眼前を疾走しゆけるなり、
 そは遠く朧なる光のうちより
 をりをり獨樂のごとく舞ひ來れども
 瞬時、路傍に蹲まれる群集は
 灯をもとむる黒き蝶のごとく飛びたち
 叫喚し、殺到して、忽ちに奪ひ去るなり。

妻よ、子よ、

われらが待つ空きたる電車は
 われらが望むよりよき時代とひとしく

容易くは來らざるべし、

ああ、さらば夜寒のしばしを
 せめてはこの父のごとくにして過せ。

父はいま、読みさせるスバルゴの「マルクス傳」を
 小溝に棄てて、
 ちかき枯柳に身を凭せ
 静かに瞑目し、微笑するなり。――

見よ、眞白き雪の大地は

燦爛たる市街の燈火の斑をちらせる

壯麗なる白孔雀と化し、

三人をのせて、遠く、遠く、

星宿の胎に翔る。

思慕

朱の厨子は古びて

夕

白き蝶のむらがる。

その底に

亡きひとの顔を

搜たづねよと云ふや。

戀人このこが遺のこせし黄金きんの腕環うでわ、
その姿すがたに

木犀もぎせの花は咲き、

もの言ことはぬ鑰かぎに似にて黒く

夕ゆふべの青空あそぞらを

ゆく小鳥こどり。

力

二月ふたつきの朝あさの青空あそぞらのもと

しづかに、美うつくはしく

はろばろと林野はやを裏うらむ

残のこんの雪ゆきをいとほしめ。

されど、更に智慧ちゑある者は、

今しそのうへを黒き翳^{かげ}して
 大膽^{おほぞろ}にかけりゆく子供らの
 汚泥^{なご}の足をいとほしめ。

ああ、そは純淨なるものを褻^{けが}して
 なほそのおもてに
 力^{ちから}つよき神の姿^{すがた}を描^{えが}く。

こころの月

こころ
 心のおくの
 月^{つき}かげの
 照^てらすこみちぞ
 しづかなれ。

57 妻をもつれず

わが子をも

誘はでひとり

たどりゆく。

心のおくの

月かげの

冴ゆるこみちぞ

たのしけれ。

神の破屑

白晝の月見草

その葉かげに轉んでゐる赤い手毬、

毛絲の手毬。

空は青く晴れてゐる、

わたしが微睡んだ間に

吾兒はいつ來て何處へ去つたのであらう。

叢のなかに

大理石の破屑が煌く、

それは日に刻んでは毀つ

わたしの神の像。

吾兒よ、

白晝の小鳥も啼かぬ叢に

父の夢の工房を

おどろかせ、過ぎた微風よ。

ほの黄にすがれた月見草、――

その傍に散りぼふ醜き神の破屑に

汝がやさしき蹠を傷めそ。

花粉の沙漠

——或る日のフアンタジー——

黄ろい、海のやうな花粉の沙漠、

その涯に、はろばると

あをざめた月がのぼる。

縛られてゐるのか、また

解き放たれてゐるのか

わたしは知らない。

石のやうな駱駝の背に

女と私は

裸のままのせられて、顛へてゐる。

おお、あの夜の夜空の深さを見よ、

それは碧玉の聖龕だ、

その凄まじい蒼い光の反射を見よ。

「宏おほきな花が、燦うつくく夢ゆめが

遙かのうへにあるのです、

そこから花粉がこぼれてくるのです」と、

女は恐るおそる囁いた。

黒髪にも、赤い唇くちびるにも、

象牙のやうな肋にも

ふりつむ黄きいろい霜が戦たたかいてゐる。

「いつ夜は明けるのだらう、

眩しい晝になれば

花の姿は見えるのだらうか」

わたしは寂しく呟いて

手綱たづなをとつた、

石のやうな獣けだものの背に。

音もない花粉の吹雪、――

その遠い底に

あをざめた月がひとつ。

空の羊

— A Mille. C. Sagara

黄金きんの小鈴こすずを

頸くびにさげ

啞おとしの羊ひつじは

群むれ過すぐる。

昨日きのふも今日けふも

夕月ゆふづきの

さむきひかりの

丘おかの上。

ありし日

君きみとうち仰あふぎ

青あをき花はなのみ

咲さきみちし、

空そらはるばると

わかれては

悲しき姿の
ゆきかよふ。

ちぎれて消ゆる

雲なれば

また逢ふ牧は

知らねども、

こよひも寂し

鈴鳴らし

空の羊ぞ

群れ過ぐる。

夕
星

人は去れり、
 黙して草に坐せば
 夕の諧調は和やかに
 樹樹をめぐる。

青白き蜘蛛の網を

はれるごとき空、
 そこには
 ひとつ星も煌けり。
 人去れりとして
 なに寂しからむ、――
 幼児とともに
 歌をうたふ。

室内風景

夕暗ゆふぐみの室へやのなかで

私の夢が静かかに醸かされる。

青い粗羅紗つづに包まれた

一隅まるてえぶるの圓卓えんさく子が

黝くろずんだ丘かみの姿すがたに見える、

ほの紅はらい薔薇らむぎが、黄昏たそがれのなかに
その麓ふもとをつづつてゐる。

丘かみのうしろに

蒼白あまじろくひらけた海は

夕ゆふべの玻璃がらす扉い、

マチヨリカの筆筒ふでづつは

73 遠く沖をゆく奇異な三橋船。

私がいま横よこたはつてゐるのは

臥椅子ふいすの氈かほではなくて

ながく柔かい丘をかの草、――

私はそこで幽かすかな海鳴うみなりと

微風とを聴いてゐる。

ああ、いづくとも知れぬ異郷の

遠さ懐なつかしさ、――

かかるとき丘邊をかべに、家畜かちくのごとく

ふとも立ちあらはれた家婢よ、
しばし、燭むすを齋いたすをやめよ。

夕星は、いま

海のはてに煌きらめきいで

紅あかい薔薇ばらは、丘かを繞めぐりて

ひとつびとつ、ひらきそめる。…

丘の午後

丘邊の午後、

佇んでゐるふたりに

ざあつといふ寂しい音がきこえた

「なんでせう、波の音のやうね」

妹は囁いた、

「やうなな」

私も心もち首をかしげた。

やがて、もう一べん

ざあつといふ音が

晴れわたつた秋空に響いた、

黍畑のかげから洩れくるそれは

朝の、また夜の、あの快い

砂を噛む波の音にちがひ無かつた。

黍の穂を摘み

ちつと耳澄ました妹の胸には、一月まへの
あの東北の海邊うみべが浮んでゐるらしかつた
華やかな日光と、その下で泳ぎ戯れた
若い、眉の秀でた青年たちのことが――
私はまたおなじ旅の夜に
ひとり目ざめては聴いた潮の遠音とほねと
そのころの深い苦惱なやみとを呼び起した。

ふたりは吸はれるやうに
その方へ歩み寄つた、

見ると、黒く光る茄子畑なすばたけのうへに
雀が一ぱい群れてゐた、
かれらは群れたつたびに
惶あわただしい羽音をたてた。

妹いもうとと私は無言のまま
寂しい微笑びせうを交した、
そして、澄み切つた秋の日光ひかりを浴びながら
また丘をのぼつて行つた。

槻の木

「いい空だな」

二階の縁に出て、私は獨りごちた

裏庭の

たかい槻の樹の間に

久しぶりで覗いてゐる初秋の空が

たまらなく懐しい色をしてゐた。

階下へゆくと

しんと明るい六畳の室に

やつと癒りかけた四歳の女兒の

白い臥床が敷いてあつた、

五所車に大きな櫻の花をちらした

派手なめりんすの子供蒲團がひろがつてゐた、が

枕もとの薬櫃の傍に

赤い膨んだゴム風船が二つ轉げてゐるだけで

臥床の主は見えなかつた。

82 庭の方で華やかな笑聲わらひこゑがしてゐた。

「いい空だな」

私はもう一べん二階の縁えんに戻つて

莨あざみをふかしながら

濃青こあをの秋空を眺めた。

見知らぬ愛人

さびしい夜よるだった。

電車は何臺來ても

あなたの姿は見えなかつた、

夜よるの微風のかよふ

郊外の停車場の、プラットホームの上に

83 いくたびか燦かがやかしい群集ぐんしゆは雪崩なだれた。

それらは青い薄紗でつつんだ螢籠のやうであつた、

夏の夜の電車は。――

そして遠くからは、燐火のやうにも

また色褪せた紫陽花の簇のやうにも見えた、

をりをり海鳴りのやうな音を

星空にひびかせた。

八時に着くといふ約束が

もう小一時間過ぎてゐた、

私はやけに煙草を燻らせ

なまじろい、人の顔のやうな待合室の時計と、

け懈く睨め合つてゐた。

「どうして来ないのだらう」

私はあなたの美しい俤を、それから

今宵あなたを引きとめた周囲の人人の姿を

胸底で切りきざんでゐた、

ちやうどあの簞虫に與へるため

色とりどりの毛糸を鉄で切りこまざくやうに。――

あきらめて階段に歩をかけた私に、
もう一べん、風のやうな音をたてて、
電車がついた。

扉口から蛾のやうな群集が簇り下りた。

この時である、私が

小柄なA氏の姿を人ごみの中に認めたのは。――

A氏は褐色な麻の獵服を着てゐた、
白い洋装をした幼ない娘を伴れてゐた、

「どちらへ」と、聲をかけた私に、

瞳のくろい、心もち蒼白めたその顔が、かう答へた。

「國の父が急に亡りましてね。これから、

歸るところです。」

悲しみは、草の香のやうに

夜の微風のなかを、つよく泛つた。

見ると氏の足下には、重い旅靴が

幾つとなく轉げてゐた。

幼ない娘の手をひき

人波ひとなみに揉もまれてゐるその姿が
弱く、いたはしかつた。

私は黙したなり、旅鞆の幾つかを抱かかへて

A氏に躡ついて電車に乗つた、

荷物を棚にのせながら、私の心は

A氏の故郷ふるさとなる、林檎の白い花咲く北國きたくにを、
おもひうかべた。

「ありがたう、ありがたう。」

「ではお大切に。」

A氏の眼は感謝で燃えてゐた。

電車が去つたあと、

私はもう一ぺん、ひとりぼつち、淋しく、

郊外の停車場にとり残されてゐた。

ああ、おもへば、その夜

あひ見ぬあなたの愛は、遠くから

いかに奇あやしく私わたしに作はちかけてゐたことよ！

私はあなたの白い手のかはりに

見知らぬ愛人の、より硬い、しかし
温かい手を握つた。

そしてあなたに觸るべき双腕が

亡き父の柩ひつぎにいそぐ旅人の旅囊たびぶくろを抱いた。

まことに、その一夜、私の夢が

いかにやさしい星の光と

快こころよい微風とにつつまれてゐたことよ！

白き刺繡（小曲七篇）

嫁ぐひとに

—若き師のうたへる—

きみ嫁ぐ日は

明日ならむ、

こよひの雨の

窓をうつ。

わが手に秘めし

青玉よ、

人にわたりて

曇りなそ。

きみ嫁ぐ日は

明日ならむ、

さびしき雨の

やみもせで。

幌馬車

見おくれば
君が幌馬車

はろばろと

小さくなりゆく。

はろばろと

並木の路を
粉雪ふる夕に
とほく。

ひとときの後なり、

いまも

空幽か

君が馬車見ゆ。

あはれそは

戀のまぼろし

月の上を

黝くゆく鳥。

靴と種子

あなたの脱いだ

紅靴に、

こまかな土を

盛りませう。

あなたの脱いだ

紅靴あかぐつに、

ダリヤの種子たねを
蒔まきませう。

ダリヤの花はなが

ひらくまで

いつそあなたは

歸かへしやせぬ。

三日月

春はるさむき夜の

三日月かづきは

おとせし櫛くしに

似たりけり。

おとせし櫛くしは

銀しろがねか

黄金きんか瑪瑙めなうか

わかたねど。

われ若わかうして

黒髪くろかみの

優やさしき胸むねに

ふれしとき。

心みだれて

春さむく

おとせし櫛くしに

似たりけり。

書物

月の夜は

大きな書物、

ひらきゆく

ましろき頁ぺいぎ

人、車、

橋の柳は
美しくならべる活字くわつじ。

樹こがくれの

夜よるの小鳥こどりは、

ちりぼひて

黒くろきふり假名か名な。

しらじらと

ひとりし繰くれば、

懐なつかしく、うれしく、
悲し。

月の夜は

やさしき詩集、

夢のみをかたれる詩集。

歌留多

遊びに失せし

一枚の

歌留多は町に

得らるべし。

その夜の君に

失^{うしな}へる

わが心こそ

わりなしや。

火

雪のふる夜に

花がさく、

わたしの庭^{には}に

花がさく、

真^ま紅^かな薔^ば薇^らの

花がさく。

母のうたへる

花はそれそれ
忍ぶ夜の
可愛いそさまの
蕘なほこの火。

帽子

いとし兒を

家にのこして

帽子屋に

帽子えらめば。

兒の面は

樹の間の月か、

草かげの

細きながれか。

胸ぞこに

浮びてあれど

懐かしく

捉へがたなし。

いくたびか

兒この幻まぼろしに

被かぶせては

わりなく棄すつる。

とりどりの

帽ぼうし子のうへに

夏なつの夜よの

灯あかりかげは更ふけぬ。

夢

夜よなかに

ふと眼まなこざめると

三さんつになる女おんなの兒こが

はげしく笑わらつてゐました、

ねむりながら、さも樂たのしさうに

聲こゑたてて笑わらつてゐました。

母親は手をかけて

その子を揺りさました。

「嬢や、夢ですよ、

みんな夢ですよ、

さ、起きてお母さんの顔をごらんさい。」

女の兒はバツチリ眼をあいて

うれしげに母親の面を見まもり、

ふたたび安らかな眠りに入りました。

自分の臥床に戻つてから

母親はなせか永く眠られませんでした。

ふとも悲しいところが

その胸をとらへました。

「ああ、誰かいま優しい聲が

わたしの耳もとちかく

夢ですよ、みんな夢ですよ、と

囁くことはないであらうか、——

さうして眼をひらくと

あたりは輝かしい十六の若い朝で

枕邊にあの昔懐かしい父と母が

微笑んでゐることはないであらうか。――！

しづかに更けゆく春の夜よ、

母親の眼には、いつか

幼児のやうな涙がわいてゐました。

動物園

春さむき日の

動物園

人としゆけば

寒ふる。

鸚哥は籠に

猿は木に

南の國の

黒豹は

日光を佗びて

ねむるころ。

餌を慕ひよる

馴鹿に

家に残せし

病める兒の

寂しき腫を
おもひいで。

春さむき日の

動物園

人としゆけば

笑ふる。

雪の夜かたり

雪はふるふる

夜の街に

あはれな母子かやこがありました、

「母かあさん、ぼくは歩けない、

お腹なかがすいて歩けない、

麵包ぱんのかけでも欲しいな」と

男のこどもが言ひました。

「おお、おお、さぞや饑うじからう、

何なんなと買かつてあげたいが、

お金はつきる、宿もなし、

せめてこの夜が明けたら」と

母は涙で言ひました。

雪はふるふる

月の夜の

他國の街は更けてゆく。

母子ふたりは抱きあひ

うすいマントに裹まつて

冷たい夢に入りました。

その翌朝の青い空、

雪消のみちに、ゆくりなく、

落ちたマントを拾ひ上げ、

町の巡査が裡見れば

やさしく咲いた水仙の

花がふたもとありました。

雪はふるふる

世とわかれ

母子は花と化りました。

尼港の虐殺

娘よ、

三歳の娘よ、

この午後はおまへと父親の二人ぎりだ、

おまへは縁で積木を遊び

私は椅子に凭つてゐる。

けふは静かに話さう、

母さんの歸るまで

あのニコライエフスキの怖ろしいお伽噺を。

氷にとちられた西比利亞の港の町で

六百の日本人が慘らしく殺されたのだ、

悪鬼のやうなバルチザンの手に掛つて。

(おぼえてゐよ、大正九年の春の出来事だ)

二箇中隊の日本軍人は雄雄しく防ぎ戦つたが、

敵の勢は限りなく、しかも蠍のやうに
 何れも兇猛な武器を携へてゐた、
 敗れ、屠され、領事館は焚かれ
 わが同胞の死屍の上を、顔を、四肢を、
 パルチザンの重い泥靴が踏み躪つた。

ああ、更に毒手に捉はれた百四十の同胞は、
 暗い冷たい牢獄の底に、犬のやうに繋られ、
 世にも非道の虐げを忍んだ、
 若き母は裸體の儘に父親の傍に辱められ、

生きてはおまへの友となるべき可憐の幼児は
 鞠のごとく壁に擲れて無慘に死んだ。

夜夜獄舎の底に、板戸洩る異郷の星を眺め、
 一縷の希望にはかなき生命をつないだ
 同胞の心中を想へ、

(帝都の人人が 灯明るき巷のカツフエに歡語めく夜を)
 娘よ、おまへが母の歸りを佗ぶる心に幾百倍し
 よるべなき彼等は、わが援軍の到來を待ち焦れたであらう！

尼灣に進むわが派遣軍の艦足を礙げた堅氷とは
 濁り泡だつアムール海の鹹水か
 はたわが本國の爲政者の胸に結れ解けぬ冷き氷か
 そはいづれとも知る由もない。

ああ、かくして、忘れがたきは

五月二十四日の夜半ぞ！

黒龍の水も逆まけ！

月も泣け！

萬里の異域に棄てられた哀れなるわが同胞の血は

最後の一滴まで搾りとられて

風腥き河畔の砂を赭黒に染めたのだ！

娘よ、

六月の青葉にいまわが帝都の晝は静かだ、

女は白い絹の手套を穿めて窓に小説を読み

男は蟬に似る羅き夏外套を纏つて電車の中に微睡んでゐる、

遼東の還附に悲憤の血を湧かせ

ポーツマスの媾和に激して官省を焚かうとした

あの遠い日の情熱は已に國人の軀を去つてゐるのだ、

それとも、ああ、彼等は人命よりも土地を
 さままでに多く愛するの輩か？

娘よ、

せめてはこの玩具の赤き木片をたかく積んで、
 血の墓になぞらへよ、
 さうしてその係を永く永く胸に秘めよ。

おまへが人の母となり、髪白き祖母となる頃
 この世は今よりも更に輝かしく

今よりも更に聰慧になるであらう。

そのとき、おまへは孫等を膝のほとりにあつめ
 此ニコライエフスクのお伽噺を徐ろにして聽かせるがよい。

斯も迂愚なる爲政者の群の下に

かくも冷やかなる國民の環視のうちに、

六百の同胞の貴き生命が

一片の麥程のやうに簡易に失はれ去つたことを、――

さうしてかのアルメニヤ人の虐殺にもました

名も無き血の行爲が

恬然と、何等の反省もなしに行はれた
 恐ろしいこの民族の曙の時代のことを。――

おそろく未来の孫等は小さな首を傾げ、

この奇蹟に似た時代を信じないに違ひない、

しかもやがて動かすべからざる事實を覺るとき

かれらは愛らしき眼を瞋らせ兩の手をふり絞つて

昔の人類の愚さを、無智を、刻薄を、恥知らずを

罵り嘆くであらう！

さうして永い歲月、日本の國に忘れられた眞實の涙が
 このときはじめて

これらニコライエフスクの惨死者のうへに

春雨のやうに優しくしづかに濺がれるに違ひない。

（一九二〇・六・一二）

四萬より

Y先生。

その後はご無沙汰いたしました。皆様おめでたく御越年のことと存じます。私は暮からこの寂しい雪に埋れた山間の温泉に來てをります。毎日毎日雪の降るのを眺めながら炬燵にあたつて Parerga und Paralipomena 一冊に讀み耽つてゐます。かう書きますと先生はまた例のシヨオペンハウエルかと

お笑ひになるでせう、が今の處私には他に心を入れて讀んで見たいと思ふやうな書物が一寸見當りません。——暮の二十六日に私はふいと思ひたつたままこの本一冊を持つて東京を出ました。さうして氣紛れにこんな處へ來てしまひました。併し此地は(ご承知かも知れませんが)氣紛れに來るにはあまりに念の入つた場處でした。前橋で下りて一時間程を電車、それから五里を鐵道馬車、それから更に四里の雪の夜道を腕車にゆられて行つた時には、もう晝からの疲労で頭は痛くなる、手足は凍えてまるで感覺が無く、腕車の上で殆んど泣きたいばかりになりました。何の所存でこの寒い師走空に態

こんな山の中へやつて来たんだらう、せめて澁川あたりで思
止まつて伊香保へでも行けばよかつたをつくづく後悔せずに
は居られませんでした。

しかし着いてみると、ふかくふかく雪を被つた峰峰が四方
を圍繞いた山間の盆地のやうな處で、静かな、沈着のある讀
書には適はしい場處でした。毎朝日がのぼると劃然とした純
白な雪の山のうへに瑠璃いろに澄んだ青空が見えて何とも云
へぬさやかな思ひをさせて呉れます。私は毎日シヨオペンハ
ウエルを讀んだり、また靜かに種々な思ひに耽つたりして年
を越すことが出来ました。實を申せば私は只讀書をしたれば

かりでこの山の中へ来たのではありませんでした、今迄の私
とは違つて今年ことしは餅のことから妹の春着のこと、歳末年始の
答禮まで自分一切で切盛りしなければならぬのですに、そ
れを態態こんな山間へ遁れて来たのは、ひとつはこの逝かう
とする年についていろいろ考へて見たかつたからでした。先
生もご承知でせうが、今年ほど私に人生の事實といふものを
様様に味はせ、またそれについて一一深い感銘を與へた年は
今までに在りませんでした。勿論大部分はあの兄の放埒、そ
れに引續いて私の身の上についた一切の出來事、一切の變化
に關つてゐますが。――

私はなんとなく、この意味深かつた年を家事にとりまざれ
 匆忙とした間に送つてしまひたくなく考へました。何處とな
 く有終の美とでも云ふやうなものをそれに與へたい氣がしま
 した。どうせ別れるならもう一度しみじみこの年の上に立つ
 て、この年の出来事をちつと瞑思したうへ惜氣なく別れよう
 と決心しました。Parerga を一冊持つただけの私の旅行にも
 半ばかういふ意味が籠つてゐたのでございます。

思ひどほり安らかな心で年を越して今日でもう十一日にな
 ります。ひろい宿屋ですが客は私ともう一人——東京の外國
 語學校の獨逸語科の生徒でこの高崎が故郷の人——しか居ま

せん。其人も暮のうち居ただけで、正月を生家で迎へると云
 つてちき歸つてしまひました。今は室の五十もある宿にまつ
 たく私ひとりです。——今日また午頃からちらちら降りだし
 た粉雪を眺めながら、ふと先生にこの手紙を差上げようと考
 へましたのは、この年末から元旦へかけていまは居ない其語
 學校の生徒と私との間に起つたある出来事に關してでござい
 ます。この奇異な事件は私をして時の深く藏してゐる恐ろし
 い力と云ふものの前に恰んど慄伏させてしまひました。この
 事實の前に立つて私はシヨオペンハウエルとひとしく「もし
 人にしてこれを正しく感せんか、一切の過ぎ行くものは決し

て真に存在せざりしものなるを悟るべきなり」と叫ばずには居られません。おそらく先生も私がいまこれから書かうとするものを仔細にお読みになつたら、やはり私と同じく或る鋭いショックをお感じになるだらうと思ひます。

それは大晦日の夜のことでございます。私は七時頃晚餐を済ますと、ふと辭書を借りたことから知合になつた例の語學校の人——名は伊能君と云ひましたが——の室へふらり遊びに行きました。暗い廊下づたひに室の前まで來ると障子越しに明るい灯影が洩れて、なかには賑やかな小供の笑ひ聲が聞えます。

「今晚は。」と開ると、伊能君は炬燵をかかへて三四人の小供となにか頻りに興じてゐました。

「やあ。」と云つて私を見るなり、伊能君はすぐ炬燵に入つてゐた一人の小供に、

「さあ、其方へ寄るんだ。」

と命令して、更に私に、

「どうぞ此方へ。」と聲を掛けます。

私は室へ入つて、與へられた炬燵の場所をとりながら、

「君の室は賑やかでよござんすな。」

と云ひ云ひそこに居並んだ小供達をすつと見まはすと、三

人は男の兒で直ぐ近所の子らしく、一人は十二三の醜い貌をした女の子で背に赤兒を背負つてゐます。みんな田舎子でひどく汚ない身なりをし鼻汗を垂らしてゐる。

「いや、毎年來るもので皆顔馴染ですよ。」

と伊能君は笑ひながら、一人の兒の頭を軽く敲くと、その兒はまた甘へるやうにひとしきり騒ぎ立てました。私は「よくこんな汚ない小供たちを相手にしてゐるな」と思ひながらしばらく煙草を燻して眺めてゐますと、小供たちも見知らぬ人が入つて來て興が醒めたのか、ひとり赤兒を負つた女の子だけを残してちきに出て行つてしまひました。

室が寂然するとしばらくは廊下の下をながれてゐる溪流の音だけが極めてしめやかに聞えます。先刻からさらさら戸にあたつてゐた粉雪は降りやんだと見えて音もしなくなりました。

伊能君はそこに置いてあつたかき餅の罐の蓋をとつて私の前に勧めながら、

「いよいよ今夜がお別れですね。」と云ひます。

「では眞個に明日お立ちですか、もう二三日はいいぢやありませんか。」

私がつめると、

「でも、」と云ひかけて、伊能君は急に口調を改へ、

「それで今夜はひとつ貴方と遅くまで充分お話してみたいと考へてゐたんです、先刻から早く被來ればいいと思つてゐました。」

「愈愈お別れならば充分話しませう、語り明してもいい。」

私は笑ひながら云つて、巖丈な鐵縁の眼鏡をかけた伊能君の顔を凝と膽りました。

「では昨夜のロオマンズのつづきでも伺ひますかな。」

伊能君はその粗朴な犢のやうな眼にちよつと狡いひらめきを見せて私の眼を竊視しました。

炬燵のなかで私の半身が陶然と暖まつて來たのを感じた時分には、私はいつかまた珍しくもないあの今年の二月から秋までつづいた一家の悲しい事實の中の、それでもいくらか色彩のある小田原のお光のことなどを、われと自ら酔ふやうな心持で話してゐました。明るい青空にかぶ白雲のきれぎれを眺めるやうに、あの放埒の兄がはじめて女を伴れて家出した夜、終列車で國府津驛へ下りてひとり松原越しにくる冷たい海の風にマントの襟ふかく埋りながら宿宿を一一訊ねて歩いた佻しい自分の姿や、洋燈の暗い駐在所に突慳貪な巡査の女房と對しながら宿泊届を練つたときの指先の冷えや、門川

から熱海へゆく輕便鐵道に乗合せた枯草の眞鶴岬まなづるがさきで下りた旅
 藝人の一行のことなどが一一頭のなかに浮んでは消えてゆき
 ました。寒い月の夜兎を逐つて早川の海岸をいそぎながら、
 無量のおもひが胸に迫つて思はず「僕にも戀人が欲しい」と
 薄暗うすやみに叫んだ若い自分の聲が痛切に耳の底に蘇生よみがへつてきまし
 た。さうして魚鐵のお光のことを話した時には自分ながら怪
 しいほど軀みうちがほてるのを感じました。あの小説のやうな
 不思議なめぐりあひから兄の行方ゆくへを私に教へて呉れ、其上私
 に戀した女を、それなり手紙の返事もやらず（たとへ忙がし
 かつたとはいへ）棄ててしまつた自分がしみじみ悔いられま

した。話しながらも私にはこの年の出來事が一一かぎりなく
 可愛いとしく懐かしくて涙がこぼれるやうでした。――

伊能君は私のこの大袈裟なセンチメンタルな追懷談を極め
 て眞面目な顔で聽いて居てくれました。さうして父の死後僅
 かに五年にしきやならないのに私の家の資産が殆んど半ば以
 上兄の放蕩のために失はれて居たのをその出奔後初めて發見
 したこと、その結果到頭私とその殘餘の資産のうち幾分かを
 得てそれで母や妹を養ふやうな切ない境遇に立ち到つたこと
 を話した時に質朴な伊能君の顔は深い同情のいろを見せてゐ
 ました。

「貴君のやうな綺麗な詩人肌の人がこれからそんな實生活に當るのかと思ふと悲惨な氣もちがします。」

伊能君は兄らしい口調で恚う云ひました。私は自分の話をしてしまふと、胸に在つたものを残らず吐き出した一種の快さと、軽い疲労でしばらく黙つてゐました。さうして洋燈の灯かげに凝と私のいまの話について考へてゐるらしい伊能君の鬢のあたりを見てゐました。

するとその時です。いままでい汚なく寝こけた風に炬燵蒲團の上に俯伏になつてゐた女の子が突然顔をあげて、私たち二人の顔を見ながら呟くやうに「止さうかなあ……」と云ひ

ました。私は洋燈の光ではじめて明らかにその子守娘の顔を見ました。赫くもぢやもぢやと縮れた髪を煮しめたやうな汚ない手拭で鉢巻した、扁平つたい賤し氣な貌だちの子でした。さうしてぎよろりと洋燈を見た左の瞳に白い斑點が在るのが見るから不快な感を起させました。小娘はもう一度私等の注意を惹くやうに續けて、妙なしなを作つて、「止さうかなあ」と繰返しました、そして圖圖敷私の顔を覗くやうにしました。私はよく反感の強い人がするやうにわざと聴えぬふりで顔をそむけました。小娘はすぐ視線を今度は伊能君に向け變へましたが、伊能君は之れなどにはまるで頓着無いやうに凝と考

へ込んでゐるので、やがて誰も相手にして呉れないと諦めを付けたものかまた以前の蒲團の上に俯伏になつてしまひました。

しめやかに溪流の音が聞えてきます。――

「さあ今度はあなたの番です。」

と私は伊能君に聲をかけました。伊能君はムツクリ顔をあげて私を見て寂しい笑ひかたをしましたが、直ぐ口を開いて、「貴君も今年はずるぶん珍らしい苦勞をなさつたやうですね。だが僕も今年ことしは生れてからいままでに無い妙な經驗をしました。貴君あなたのと較くらべると私のロオマンスにはすこしも色彩が無

い。それは反て後後のちのちの僕の生涯をすつかり寂しくしてしまひました。」

伊能君は茲で言葉を遮斷とぎらせて、妙に擦くすつたい表情をしたが、

「僕は今年妻ことしを持つてまた別れたのです。」

と云ひました。

容易ならんと云ふ感じが私の胸でしました。これは今までの夢みがちな私の話とは全然違ふやうな氣がしました。粗朴な伊能君の口から出る話は何處か厳格な響きを持つてゐました。伊能君はどうせ口を切つたからには相手が聴いても聴か

なくても話すだけは話すと云つた調子で語りだしました。

「ちやうど今年の四月のことです。僕と同じく学校の獨語科に居る男で——岐阜の者ですが——かなりの親友が或日僕に妙な話を持つて來ました。それは其男の郷里のある富裕な家で養子を欲しがつてゐる處があるが、ひとつ行つて見ては如何だと云ふことでした。今の僕ならそんな話はどんな條件が付いても厭ですが、其頃の僕はなんとなく浮いた華やかなあこがれで一杯になつてゐました。なにしろあの江戸川の終點に大きな果物屋くだものやが在りませう。あの傍そばの老人夫婦の二階に僕は孤獨ひとり寂しく生活してゐたのです。故郷こくには遠いし、學校か

歸宅かへつても誰ひとり優しい言葉を掛けて呉れるでは無く、ご承知かも知れませんが下宿生活ほど厭なものには有りません。それに僕はご覽の通りのガサツな田舎者あなかのですから、心ぢやいろいろに血を湧かしてゐても他ほかの友人仲間が話す様に學校への往復の電車のなかで華やかなロマンスが出来る譯ぢや無く、さうかと云つて金は無し、ちつと冷たい机にもたれて涙がにじみ出る日も多かつたので、この話を聞いた時には何だか氣がわくわくして、直すくにも二つ返事をしたいやうな、また躊躇するやうな氣にもなつて、とにかく一應故郷こくにの阿父おやぢに相談するからと云つて其儘別れました。」

「その話を聞いてから僕には何とも云へない楽しい幻想が湧いてきました。温かい上品な家庭、美しくて淑やかな妻、そのなかに今までの生活などよりは遙かすつきりした主人らしい風で暮して行く自分の事を酔つたやうな心持で考へずには居られませんでした。家へ歸ると即刻僕は故郷の両親に手紙を書きました。それには出来るだけよく先方の事を書き、この話が成立てば自分の學問の修業上にもどんなに好都合であるかを両親のかう云ふ一般の事情に晦いのを利用して大袈裟に書きたてました。無論両親からの返事は決して悪い返事ではありませんでした。家は貧しい百姓ですし、それに兄が

居るので私は何處へ行かうと自由な身體でした。——おまへの幸福になる事なら俺たちに別に文句は無い、只だよく考へて事をしろ——とのことでした。」

「こんな工合なので話はどんどん進行しました。さうして五月の初めには両親とともに國から出てきた先方の娘と其友人の家で會ふやうなことになりました。眼の大きい背丈の小づくりな神経質らしい顔だちの娘で、年は十九、容貌と云つても十人並とまで行かない女でしたが、それでも女欲しやの僕のこころを満足させるには充分でした。

萬事話は濟んで結婚式を擧げるばかりになりました。六月、

學校が休暇になると直ぐ僕は岐阜の其家へ行き、式を済ませ
てから引續きしばらく其處に滞在することになりました。養
家は友人が云つたほど富裕では無かつたですが、五十三にな
る父親が縣廳のかなりいい所へ出てゐますし、小金も相應に
は有る居心地のいい家でした。その……」と云ひ掛けた時伊
能君はふと話をやめ傍を向いて、

「何だ。」と鋭どく云ひました。見るとまだ先刻の子守娘が
何時の間にかムクムク頭を擡げて炬燵蒲團の上から両手でグ
イグイ伊能君を押してゐます。そして、

「ええ伊能さん眞個に止すべいか、云つて呉れよう。」

と強請るやうに賤しい訛音で云ふのでした。

「何を止すべいだ？」

伊能君が咎めるやうに云ふと、其娘は例の白眼で私の方を
チロリ見て、

「ほんとに止すべいかよう、平さんの處さ行くのほんとに止
すべいかよう。」

と繰返しました。

「蒼蠅いな、止せつて云つたぢや無いか、さ、もう内儀さん
が呼んでるぞ、早く母家へ行け、何時までもゐて人の話の邪
魔をするんぢや無い。」伊能君は激しく云つて手を拂ひ除け

ましたが、子守娘は泣顔もかかすなほ執拗く、話を続けようとする伊能君を、

「よう、よう。」

と云つて押すので、やがて腹を立つたのか伊能君は突如平手でビシヤと打ちました。娘はちよつと吃驚いたやうな顔をして伊能君を見てゐましたが、直ぐに今度はシクシク泣出して其儘何にも云はず消氣た風で靜かに障子を開けて外へ出て行きました。

私は消氣た姿にふと心を惹かれて、初めて娘が何を強請んでゐただか訊いて見たい氣がしましたが、伊能君は出て行

く小娘を見送つて忌忌しさうに、

「だんだん圖圖敷なつて仕様が有りやしない。」

と呟いたなり、直ぐ以前の落着いた調子に返つて言葉を續け、

「岐阜にゐたこの二週間と云ふもの、僕はこの時代が過去から將來へ互つて、僕にとつて最も楽しい季だつたのぢや無いかと今だに思ひます。僕の愛は満足され、僕の慾望は果され、妻も眞底から僕を愛してゐて呉れました。」

併し二週間ほど経つと二人はんあ密月旅行と云ふやうな譯で、關西地方を遊覽に出掛けることになりました。大阪へ二

泊、京都へ二泊、諸方の名所を見物して伏見から宇治と、最後に奈良へ下りたのは午後のちやうど三時頃でしたらうか。貴君は奈良にはお精しいやうだから御承知でせうがあの猿澤池の傍の印判屋といふ旅館に手荷物を預けて、二人ぶらぶら春日の鳥居から若宮と見物してまはりました。糠煎餅を欲しがる鹿を見ては妻は小兒のやうに笑ひこけました。それからあの三笠山の麓の草原へと出てきたのですが、夏の日はまだ静に照り、長く伸びた草の上を妻は紫の派手なバラソルをさして僕と並んで歩いてゐました。如何云ふ譯でしたか二人はかなり長い間何にも話さずに黙つて凝と草を踏んで行きまし

た、踏み拉かれてまた起直る草の音だけが僕等の後に聞えました。静かな、静かな、その時です、日は音も無く照り草はやはらかないきれを立ててゐるのに、突然その中から何とも知れず冷つと氷のやうにつめたく僕の胸に觸れたものがありました。——僕は今だにそれが何だつたかはつきり記憶えませんが、併しその物がつと胸にふれると僕は身體中に何とも云へない慵さを感じました。五體の節節が切り放たれたやうなだるさを感じました。それなり僕は茫然氣拔がしたやうになつてしまひました。妻は顔色で見たか不審氣に直ぐ寄添つて「あなた、どうかなさつて？」と訊きました。僕は頭を振つ

て只「いいや」と答へました、併しさう答へた時に何故だか云ひ知らぬ悲しい情が胸に迫つて思はず涙がこぼれさうになりました。凝乎と涙含んだ眼で妻の顔を見つめました。――

「これから後は申しますまい。今おもへばそれが僕が妻に掛けてやつた最後の情の言葉でした、それからの僕と妻との間は今迄と違つて常に背反に行くやうになりました、と云ふのは此時以來僕の心が今迄の僕の心で無くなつたからです。今までは夢のやうに楽しかつた新婚の生活が突然僕にはただ徒らに甘い、如何にも物足り無い生活に思はれました。あれほど熱烈に愛してゐた妻が何だか急に脂つこい執拗なものや

うに思はれてきました。随分莫伽氣た嘘のやうな話とお思ひになるかも知れませんが、未だに僕は僕自身の此心理を説明することが出来ないのです。

氣の毒な妻は旅から歸つた以後それでもよく僕の素氣ない舉止を堪へて僕をも一度以前の僕に返さうと努力したらしく九月に新學期が始ると一緒に東京へ來て養父が持たせて呉れた家に同棲してゐましたが、よくよく辛棒が出來かねたと見えて或日僕の學校へ出た不在に一封の置手紙をして國へ歸つてしまひました。その書置きを開けて見ると、中には僕の無情を罵り、ただただ財産を目あてに自分には一點の愛もなく

結婚した薄情者と散散な恨みが書いてありました。何と云はれても仕方が無い。——と思つて私は觀念の眼を閉ぢました。やがて二日程すると國から養父が出て來て怒氣満面のきびしい掛合を持ち込みましたが、その甲斐も無いと見るや直接僕の實父の所へ行つて話を付けることになりました。媒介役をつとめた私の友人も非常に心配して其間に立つて種種調停して呉れるので、僕もそれではと云つて出来るだけ自分の情を抑へ友人を顔を立てようとしたのですけれど、憊うなると反つて女の方が情強いもので一月後には愈々入れたばかりの僕の籍をまた抜くことに成行つてしまひました。紛紜が濟んでま

だ今日で二月にしきやなりません、此事件のために寂しかつた僕の生活は以前よりも益々寂しくなつてしまひました。それから先も僕には戀などは勿論結婚などと云ふ事は一切出來ないのぢや無いかと思はれます。假令出來たにせよ皆こんな結果に陥つてしまふのでは無いかと思ふと非常に寂しい氣がします……。」

伊能君は話し終るとひとつ大きな嘆息をつき、考へ深い目付であたりを何となく見廻しました。さうして私を見ると、「つまらない、貴君のロオマンなどから見ると味も艶も無いものです」と自嘲するやうに笑ひました。 A Pale mar-

tyer in his shirt of fire 何とも知らずアレキサンダー・スミ

スのこの短かい詩句がふと私の胸に浮びました。深い夢から
覺めたやうに私は口を開いて、

「面白い——と云つては失禮ですが、ほんとに興味ふかく伺
ひました。貴君あなたにとつては随分切ない御經驗だつたでせうが
一方考へて非常に稀有レアな貴い御經驗をなさつた事のやうに思
はれます。併し……」

私は何か思付いた批評のやうな言ことを云つて見たかつたが、
伊能君が非常に興奮してゐる様で其以上何か云はれるのを好
まない風だつたので態と控へました。さうして心中でこの素

朴な實務的な人が内的に極めて光つた Kategorischer Imperativ
的經驗を有つてゐるのに吃驚してゐました。

夜はひどく更けたらしく、川瀬の音がますます耳に澄んで
聽えます、年の逝く夜とはいへなんとといふしめやかな沈着おちつ
いた流れかたであらうと私は思ひました。

「過ぎてゆく年は不思議ですね。——」

私が沁沁思入つた調子で云ふと、

「さうです、ほんたうに不思議です、そして無暗に残り惜し
い氣がします、この年は眞個ほんたうにいろいろの事を僕に教へて呉
れたのですがね。」

伊能君は淋しく云ひました、歎すすりないてゐるやうでした。灯ひにそむいた眼に涙が光つてゐました。私は氷の中にでも居るやうな哀感に閉ぢられてしまひました。

しばらくすると伊能君は急に勢よく立上つて、

「話が理に落ちましたね、どうです、もう夜も更けたやうですから一風呂浴びて寝ようぢやありませんか」

と云ひました。

「さうですね」と答へて私が静かに立上ると伊能君は一寸机の上の時計ウオッチを見て、

「もう十一時すこし過ぎてゐます、あつたかく湯に浸りなが

ら追憶おもひでの多い年を送りませう。」

私たちに暗い廊下をめぐりめぐつて新館しんくわんの浴室に行きました。この秋建てたばかりの檜の香のする廣い浴室には淡い灯あは影がたつぷり湛たたへた人造大理石の湯槽ゆぶねを照らしてゐるばかり寂然しんとして誰も居ません。たちのぼる湯氣は四方の玻璃戸がらすどに凝つて霜となつてゐました。

「今頃は東京はさぞ賑やかでせうなあ。」

伊能君はぢやぼんと飛込んで、悠悠湯槽の縁に頭をのせ手足を伸ばしたまま恁つう云ひました。

私もおなじく暖かく湯に浸りながらちつと眼を瞑ちて今夜あ

たり銀座街頭の雑沓の光景を思ひ浮べました。それに次で今までいろいろに暮してきた大晦日の夜の有様が一時に繪のやうに頭に浮んできました。

「併し田舎は呑氣なものです、宿だつてもう皆寝ちまつたでせう。」

伊能君は流しへ出てタオルでゴシゴシ身體を洗ひ始めました。私はその言葉でふと思ひ出して、

「それはさうと、先刻の娘は何をあんなに強請るやうに云つて居たんです？」

「先刻の娘？」伊能君は怪訝な顔をします。

「ソラあの炬燵にゐた子守娘のやうな……」

「あ、あれですか？」

「あいつはこの宿の子守ですが、ちよつと變つてゐます。」と答へてクスクス思ひ出し笑ひをして、

「あれは恠うなんです、僕はこれまでよく出鱈目な手相を見てやつたりするのですがね、今夜も室へ來た子供達の手相を見てやつてゐたのです。おまへは陸軍大將になるとか、いい山を有つやうになるとか可加減な占をしてやつてゐますと、あの子守が私のも見てくれと云ひだしたのです。それから手を出させて例によつていろいろな事を云つてゐると、突然眞

面目な顔で「それぢやおれ近いうちに嫁に行つてはなんねえかね。」と訊きました。僕はどうも滑稽なので、

「ぢやお前を貰ひたいつて人でも有るのか。」と問返しますと、その返事が面白い。

「いかにも有るんだ」と云ふのです。近所の平さんと云ふ若衆が是非来てくれと云つてゐるが、行つた方がいかに行かぬ方がいいか一つ占つて見てくれ、と真剣な顔で頼むのです。更にその平さんの年は幾歳だと訊くと廿五だと云ひます。僕はこんな十三かそこらの小娘がばか早熟た考へを持つてゐるのに驚いてしまひました。で、面白半分態とどうも其處へ行

つては末にお前の運勢が悪くなる相が有るから止めたらよからうと云ひました。するとあの娘はひどく残念さうに、

「おら平さんが好なのだがなあ。」と二三度繰返し、更にもう一遍占つて呉れと僕に頼んでゐました。其處へ恰度貴君が被來つたのです。雪國の奴は家内にはかり居るせいか妙に小供まで性慾的になつてゐますよ。」

「ははあ、それですね、君に叱られて出て行く時非常に悄氣てゐたのは……。」

私も軽く笑つてそれなり黙りました。いかにも寒さの厳しい夜です、何處か廊下の方で柱の凍み割れる音が折折ピン

と響いて聞えます。ちよつと湯槽から身體を出すと直ぐ寒さが悚然と身に沁みます。仰ぐと浴室の風通し戸の玻璃から仄かに薄白い雪の峰が見えます。いつの間に雪が降り罷んだか月光のやうなものが憎乎と山頂を罩めて見えます。静かな心になつた私には何か面白い精靈のやうなものがあの雪の嶺を今年から來年へと越えてゆくのぢやあるまいかと思はれました。

逆上性の私は直き湯から上つて、伊能君に挨拶して一足先に部屋へ戻りました。

Y先生。

翌朝眼を覺すと日が麗かに障子にさしてゐます。

「元旦だな。」と思ひました。次いで、

「雪の解けないうちに早く出ます」と云つた伊能君の言葉を想出して、急いで楊子を啣へたまま浴室へ行きました。さつぱりした心持で飛石傳ひに室へ歸つてきますと、明るい冴え冴えした日が縁一杯に照りわたり、室の前には何時の間にか小松の枝が二三本打ちつけてありました。とにかく廊下傳ひ

に川添ひの伊能君の室へ行つてみますと、伊能君は大きな信玄袋をひろげて本や其他の調度を入れてゐる所でしたが、私を見るとニコニコしながら、

「おめでたう。」と云ひます。

「昨夜は遅くまでお邪魔しました。」

私も挨拶して、

「どうです、お急ぎでせうが一緒に僕の室で雑談を祝ひませんか。」

伊能君は手早く其處等を片付けて、伴だつて私の室へやつて來ました、さうして又しばらく雑談しながら宿から寄越し

た雑談を祝ひました。

「ぢやあ早速ですが雪の解けない間に出掛けるとします。僕は關善(隣の旅館の名)の方からまはりますから。」箸を置くと伊能君は恚う云つて室へ戻りました。

溪流を挟んでこの温泉場にはただ二軒の旅館があります。

僕等の宿は田村と云ひました。私の室は其新館で丘の上にあるので、通りへ出るには正面の急な坂を下り門から出るのですが、伊能君の室は川添ひにあるので室の前から直ぐ丸木橋を渡つて隣の旅館の庭を抜ける方が近道なのです。二人が散歩する時にはいつもさうしてすぐ下手の橋で落合ふことにな

つてゐました。

私は平常着の上に厚いマントを羽織つたなり門を出て坂の上の梅の木に靠つて、伊能君の姿の下に見えるのを待つゝました。

元旦の空はあくまで紺青に晴れわたり、四方を取巻いてゐる純の白雪の峰峰と際立つて鮮やかな對照をしてゐました。日はもうかなり高くのぼり萬山萬谿の雪をチカチカ眩むやうに照してゐる其美觀は何とも云へぬ莊嚴な感じを私に起させずには居ませんでした。

「こんな神神しい新年を今までに迎へたことがあるか。」

私は自分の胸に訊いてみました。

やがて黒いマントの伊能君の姿がチヨチヨ上流の丸木橋を渡るのが見えました。私はその影が川下の釣橋の上まで來たら、勢をつけて一散にこの坂を駈下りるつもりでなほ凝然と見てゐました。伊能君の姿は間もなく關善の浴室の傍にあらはれずつと川縁を傳つて來るやうでしたが、釣橋の際の大岩の處にまで來ると突然吸込まれたやうに其蔭へ入つてしまひました。

一分、二分、今にも橋の上へその姿があらはれるかと豫期して私は待つてゐましたが、何時まで經つても伊能君は出て

來ませんでした。偶ひょうとしたら關善のお文ぶんちゃんにでも挨拶を
してゐるのかも知れないと思ひながら、とにかく私はソロッ
口坂を下りて行きました。さうして關善の正面の橋を半ばま
で渡りかけると突然ヒョッコリ向側に伊能君の姿があらはれ
ました。

「どうしたんです？」

と私が訊ねますと伊能君は恐ろしく蒼白あざめた顔をして黙つ
たままズツと傍に寄り、そつと私の袖を引いて痙攣ひきつるやうな
手つきで大岩の方を指しました。

「一體どうしたんです？」

と云ひながら、云はれるまゝに其岩の蔭に入ると、意外に其
處には三四人の人が何かを取巻いて立つてゐました。振顧ふりかへ
つた一人は宿の番頭で、私の顔を見ると、

「へへへ」と空笑ひをして、

「どうも元日の朝つばらから旦那方にはまことに相濟まない
ことが出来しゅつたいしました。」

と云ひました。

見ると、びしよぬれになつた物が其處そこに横はつてゐて上に
荒蕪あらかもがかけてあります。それがどうやら死體らしい。

「え、誰か死んだんですか？」

と云ひながら立寄つて熟く見ると、赤い派手な女の子らしい袖裏が荒蕪から喰み出してゐます。

四圍の人は皆黙つてゐました。

そのうちに半白な此家の主人らしい男が、

「どうしたものか、可哀想なことをしました。」

と、誰に云ふとなく呟いて、些と蕪の端をつまんで死體の顔を覗かせました。見ると女の子で髪がそそけて水でべつとり額から耳へ附着き、顔はふくれ上つて眼は薄白く半ば開いたやうになつてゐます。何處かで偶と見たやうな氣がしたので私はぢつと見入りましたが、直ぐ不快になつて顔をそむけ

ました。さうして傍に立つてゐる伊能君に小さく、

「何處の子？」と訊きました。

伊能君は穏やかならぬ底深い目附で私の顔を見ながら、やはり低い聲で、

「田村の子守娘ですよ、昨夜僕の室に居た——」

私は愕然としました、さうだ、昨夜のあの子だ、明らかに思ひだす、其背に赤兒が無かつたので私はふと見忘れたのでした。

愕然として更に問ひ掛けようとする、伊能君は遮るやうに、

「さ、出掛けませう、何時まで居たつてしやうが無いですか
ら。」

と云つて、

「ちや、左様なら、いろいろ御世話様でした。」

と傍の番頭に聲をかけて、橋の方へ歩きだしました。私は
異様な感じに胸をみたされながら黙つて後に躑いて橋を渡り
終へました。すると伊能君が突然口を開いて、

「とんだ事をしてしまひました。」

と私の眼を見ながら云ひます。

「え？」

と問返すと、伊能君は投げるやうに、

「あの娘は僕が殺したのも同様です。」

「何故」と問返すまでもなく神経質な私には今云つた伊能君
の言葉の裏が明らかに讀めました。私は態と軽く、

「真逆さうぢや有りますまい、貴君は昨夜の占のことを云つ
てらつしやるんでせう？」

「いいや確にさうです。」

と伊能君は飽迄も眞面目で、

「あの娘は普通の子と何處か違つてゐましたからね、昨夜云
つた僕の冗談を本氣にしてあれから身を投げたのです、それ

に違ひありません。」

伊能君は身體中がとめどなく震へてゐるやうでした。

「十三やそこらの子にそんな思切つた事をする意識が有ると貴君はお思ひですか？」

私が答めるやうに云ふと

「他の子なら知りませんが、あの娘なら確かに有つたと僕は思ひます、どうも初めから奇異な子でした。——」

伊能君は半ば呟くやうに云つて、更に、

「僕の行く處にはいつもこんな寂しい事件が起ります——」
と低く嘆息をついた。

私は賺めるやうに肩に手をかけて、

「で、宿では何と云つてゐます？」

「田村の主人は、昨夜遅く近所へ出掛けて行つて歸途に過つて落ち込んだのだらうと云つてゐました。何しろ元日の朝勿のことでですから、皆の氣を悪くしまいと思つてまだ誰にも話して有りません。だからすこしも様子が分らないやうです。」と伊能君は答へた。

「僕はキツトあれからあの子は何處かへ遊びに出掛けたんだと思ひます。調べれば屹度それが判然つて來ると思ひます。」

と私が確信の有るやうに云ふと伊能君は寂しく鼻でフフン

と笑ふやうにしましたが、直ぐ弱氣になつて、

「僕もさう有つて呉ればいいとは思ひますが——。」

と小さく云ひました。

かうお互に不安な心持で話を換してゐる間に、私たちは疎かに寂しく路傍に立つてゐる幾軒かの家家の前を通り過ぎていつか村はづれまで來てゐました。行手に白雪の皚皚と降り積んだ山の肌が見えます。そこを回ればやはり温泉のある山の宿で、其處まで私は伊能君を送つて行くつもりでした。兩人とも黙つたまま雪を踏んで行きますと、やがてその崖蔭からヒョククリ天秤を擔いた黒い人影があらはれました。歩

一歩近付いて見るとそれは汚ない半纏着の老爺で、擔いだ左右の籠の中には縁起物の目無しの達磨が一杯這入つてゐました。

と、見て、私は何だか怪しい感じが總身を走りました。一切が恐ろしいアパリシヨンのやうな氣がしました。傍の伊能君も、死んだ娘も、この雪の温泉場も、またこの老爺の擔いだ目無しの達磨も——。

湯煙が濛濛とたちのぼつてゐる山口まで來ると、私は、

「ぢやあそんな詰らない事で氣を悪くしないで芽出度くお宅の新年をお迎へなさい。僕はここで失禮します。」

と云つて伊能君に挨拶しました。伊能君は、

「わざわざお見送り有難う。」

と幾度も叮嚀に禮を述べて、

「またいづれ東京でお眼に掛ります。」

と言葉を残したなり、首を垂れてスタスタと直きに山の蔭に見えなくなつてしまひました。

吻ほっとした氣持で急足いそぎあしで宿の方へとつて返して來ると、達磨だるま

賣うりの老爺はまだぶらりぶらり路傍みちばたに歩いてゐました。

駈けるやうに自分の室へ戻つて來て私は昨年の日記を取出しました。さうして其最後の所に興奮したぶるぶる顫へる手先で、鉛筆で、

「大晦日の夜、私等は泣くやうな、また抱愛するやうな思ひで逝く年を語り且惜んでゐた。しかし其時すでに貴重プレシヤスな翌年の出來事が身を一尺と隔てぬ處に起りつつあつたのを知らなかつた。——」

と書きつけました。そして吻ほっと溜息ためいきをついてから又思ひだしたやうに机上のシヨオペンハウエルを讀み始めました。

見知らぬ愛人 目次

見知らぬ愛人

老人と帆	三
母の唄	七
都會の記憶	九
墓	三
崖の斷層面	一四

古き時計	二六八
氷の上の藤椅子	二二二
落葉	二二五
夜の空	二二六
人形を負ひて	二二三
向日葵のかげ	二二五
ゆくへ	二二九
春の夜の霞	二二四
干瀉のほとり	二二三
掌	二二五

白孔雀	二〇六
思慕	二〇五
力の	二〇五
心の月	二〇七
神の破片	二〇九
花粉の沙漠	二〇三
空の羊	二〇六
夕星	二〇九
室内風景	二〇七
丘の午後	二〇六

楓の木	八
見知らぬ愛人	三
白き刺繡		
嫁ぐひとに	二
幌馬車	四
靴と種子	七
三日月	九
書物	一〇
歌留多	一五
火	一〇

母のうたへる

帕子	二九
夢	三三
動物園	三七
雪の夜かたり	三〇
尼港の虐殺	三四
四萬より	三四

(表誤正人愛ぬら知見)

頁行	序三	序四	8	9	16	26	116	152	159	192
6	1	2	2	8	8	8	4	9	9	1
誤	より深き 途上のこととて 添寝の吾兒の 金の緊子が ああむかしの鶯が 谿沿ひの ないであらうか。— 二階に 二人はまあ	より深き 途上のこととて 添寝の吾兒の 黄金の緊子が ああ、むかしの鶯が 谿沿ひの ないであらうか。— 二階に 二人はまあ								
正										

以上申し上げやうと思つた事實の概略です。私は廿日頃歸京いたしました。勿々。上州四萬温泉にて
S 生

大正十一年二月六日印刷 大正十一年二月六日發行 定價 金二圓五十錢	禁轉載 不許	復製	著作者 西條八十
	發行所 東京市神田區南神保町十六番地 飯尾謙藏	印刷者 東京市神田區表猿樂町二十番地 八木原重三郎	發行所 東京市神田區南神保町十六番地 飯尾謙藏
見知らぬ愛人			

發行者
東京市神田區南神保町十六番地
尙文堂書店
電話九段一七五四
振替東京一九三四四

てりよに者著同

童話	童話	詩集	抒情 小曲	譯詩	詩集
不 思 議 な 窓	鸚 鵡 と 時 計	空 の 羊	靜 か な る 眉	白 孔 雀	砂 金
三 版 定 價 一 圓 八 十 錢 送 料 金 十 五 錢	五 版 定 價 一 圓 廿 錢 送 料 金 十 錢	二 版 定 價 七 十 錢 送 料 金 二 錢	第 廿 二 版 定 價 九 十 錢 送 料 金 十 錢	絶 版 定 價 金 二 圓 送 料 十 五 錢	第 十 一 版 定 價 二 圓 三 十 錢 送 料 十 五 錢

